園長通信～こころ～ №３６

随想

2024.5.28

４月から新たな生活が始まっている。その一つに、福島民友新聞「随想」の執筆がある。毎週、火曜日、木曜日、土曜日の３回、掲載される。執筆を担当しているのは１６名である。県内の様々な肩書きをもつ多士済々な顔ぶれである。私も、その末席に加えていただいた。

最初の原稿が、４月２０日に掲載された。どんな内容にするか。さすがに考えた。出した結論は、一番、自分らしいものということだった。それが、「花咲山」というタイトルの文章となった。

さて、２回目はどうするか。また、考えた。自分らしいものをという基本路線は変えたくない。肩書きには、教育エッセイストと入れてしまった。「花咲山」は、直接、教育とは関係がなかった。さすがに、２回目は、教育に関わることにした方がいいだろう。

こうなると、教育論のようなものを思い浮かべるが、私の場合は、全く違う。小学校時代の思い出を原稿にした。それも、校長先生とのエピソードである。これも、自分らしいと言える。タイトルは、「コッペパン」とした。ちょうど、本日、５月２８日が掲載日となる。

最初の「花咲山」では、いろいろな方から、感想やらコメントやらをいただいた。一番うれしかったのは、「読み始めてすぐに引き込まれました。虜になりました。何度か読み返しました」というものである。自分の文章に、そんな力があるとは思えない。きっと、文章の内容が、その人にとってはヒットしていたのであろう。

この園長通信もそうだが、随想も、不特定多数の方が読むことを想定している。だからといって、書く内容も、そのことを想定した方がいいかというとそうではない。極論を言えば、たった一人のために文書を書いた方がよい。話すことも同じである。その場の一人に向けて語りかける方が、内容がよくなり説得力が生まれる。いい話になる。

今回は、「コッペパン」をたった一人のために書いたわけではない。読んでほしい一人がいるわけではない。教育エッセイストと言っても、むずかしい教育論を振りかざすつもりはなく、こんな感じです、というあいさつ代わりのようなものである。

４月から始めた園長通信も、今日で３６号となった。毎日、書いていれば、月に一度の随想の原稿になりそうなものができるかもしれないと思っていた。この考えは、甘かった。全く、そんなことは起きなかった。きっと、自分の中で、読んでくださるであろう対象が別々なのである。相手意識が違うのである。

したがって、随想は、それ用に考えるようになる。これが、いつ、ふと思い浮かんでくるか全くわからない。それが楽しみでもあり、こわさでもある。これからも、ぜひ自分らしい文章を載せていきたい。